

子どもにやさしいまちづくり

木下勇（千葉大学大学院園芸学研究科）

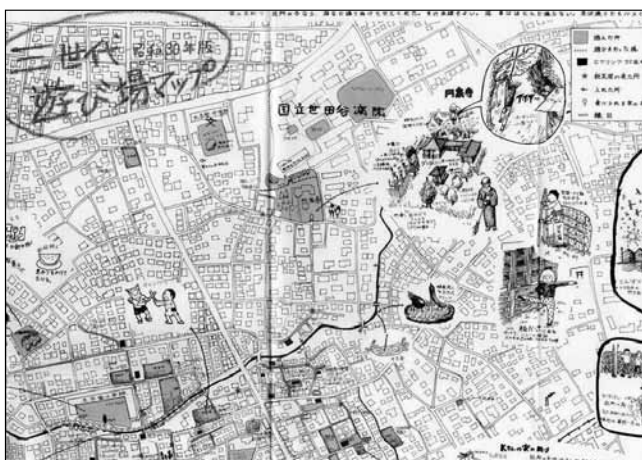
三世代遊び場マップ

大学院時代（1982年当時）に、世田谷区の太子堂というところで、三世代遊び場マップを作りました。世田谷区太子堂とは、三軒茶屋のところです。そこで育った三世代、おじいさんおばあさん、お父さんお母さん、そして当時の子どもたちに、どこでどういうふうに遊んでいたか、各世代20人ずつに聞きました。色を塗っているところが、遊んでいた場所です。

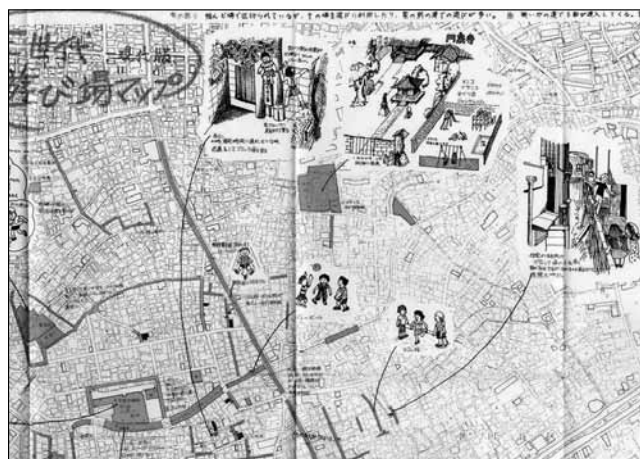
まず、1982年当時の子どもたち、いたるところ道路で遊んでいます。やかましい存在ですね（最近、子どもの声が騒音と保育所や幼稚園に苦情が社会問題となっているという、話を受けて）。



次に、昭和30年代、オリンピックの頃の子どもたち。高度経済成長、戦後の焼け跡の原っぱの時、原っぱで遊んでいる世代です。



最後に、昭和のはじめ頃の子どもたちは、自然が豊かなところで遊んだそうで、非常に活発に遊んでいる様子が分かります。



コミュニケーション

三世代目にインタビューしたときの話です。子どもらが、昔川だったところを埋めて暗渠になっているところや広場でボール遊びをしていました。ある時、いきなり花壇やプランターが置かれて、子どもらはボール遊びができなくなってしまいました。ある子どもが、「きっとあのおじさんが言ったんだよ」と言うのです。なぜなら、「前もボール遊びや色んなことをやっていると、次の日学校で怒られた」、「直接言わないで、学校に言いつける、大人は陰険だ」そんなことを言うわけです。

私たちはその時に、言っている側のおじさんにも話を聞こうという話になりました。話を聞いたなら、「どこの馬の骨か分からない子が遊んでいる。ボール遊びでガラスを割って、そのまま逃げていくので、たまらない」と言いました。確かに昔はガラスを割ったら、ごめんなさいと謝って、親が菓子折り持って謝りに行く、そういうのが礼儀でしたね。だけど、この時点でも、子どもらは遊んでガラスを割っても逃げていってしまう。「どこのやつか分からないから、学校に言うんだ」ということを言っていて、なるほどなあと思いました。

やっぱり、双方にも言い分があって、かつて嫌な思いをした子どもたちが遊んでいる中に居るかもしれないと思うと、憎らしい思いが湧き上がるからイライラする、それが騒音になる。そして子どもの声が騒音になる。

どうも、大人の色々な関係の変化、コミュニケーションの変化、そういうものが影響しているようです。騒音と感じるのは、知らない子の声。知っている子の声なら、騒音にならない、というのはその時に認識したことでした。

近隣の関係ができていて、その子どもがどこの誰か分かっていて、時々悪さをして、お母さんと一緒に謝りに来るのであれば、「まあ良いですよ、子どもの遊びだから」となるわけです。そういう会話があって、子どもの方は、

どこのオジサン、オバサン、認知しているのであれば、昔のように子どもの声は騒音にならない。

子どもの声っていうのは、やかましいのは当然です。スウェーデンのアストリッド・リンドグレン、彼女の物語、『長くつ下のピッピ』は有名なんですけど、『やかまし村の子どもたち』は、単に子どもたちが遊んでいるという姿を描いています。

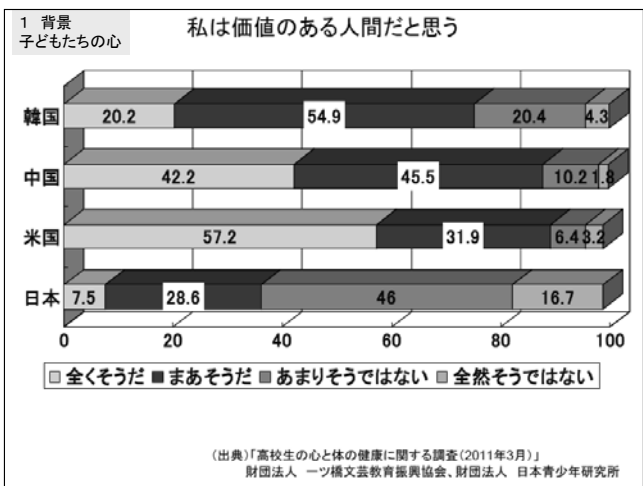
『やかまし村の子どもたち』は、向こう三軒両隣、四軒ぐらい長屋みたいなところで、子どもらを含む、色んな家族が遊んでいるところを描いている作品です。

その「やかましい」はブラビーといい、ノイジイとは違うんですね。子どもっていうのは、そういう存在というような社会的認識があるわけです。

子どもたちが「大人は陰険だ」というような心を、そういう対応で植え付けていくっていう状況が子どもらに根付いている。むしろそうせざるを得ない大人の事情はあるけれど、じゃあそういう方向でどんどん進んでいった時に、子どもたちの心にどういう影響を与えるのでしょうか。大人は陰険だと感じて育つ子どもは、どのような大人に育つのか。その時に、ちょっと頭によぎったのですが、さらに時代は進んで、保育所、幼稚園、小学校、公園で遊ぶ子どもの声が騒音と迷惑がられる社会になってきています。

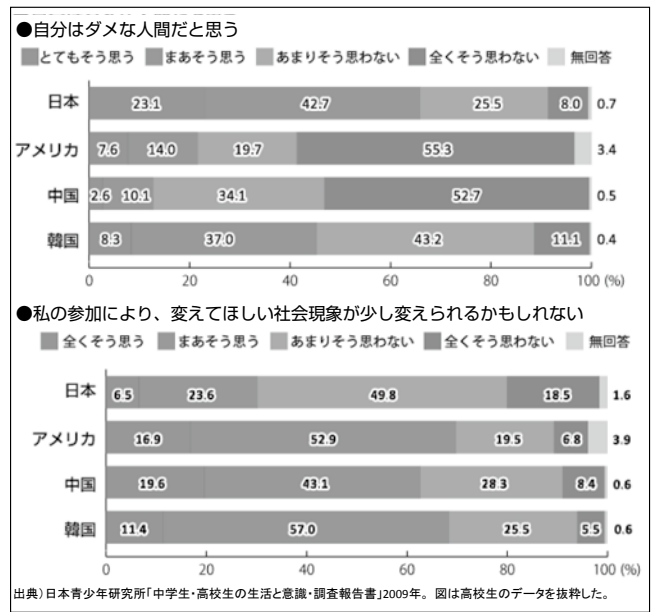
幸せ感が低く、子どもの孤独感が強い日本

一橋文芸教育振興会と日本青少年研究所と企画をして2011年に、韓国・中国・日本で高校生相当の年齢の子どもに、心と体の意識の調査を行った結果がこれです。



これを見ますと、「私は価値のある人間だ」という意識が一番低いのが日本です。極めて低いです。他の中学生高校生の意識の調査でも、「自分はダメな人間だ」というのが多いのが日本です。「私の参加により社会を変えていくことが

できる」、「少し変えられるかもしれない」という意識も低い。



ユニセフの調査でも、幸せ感が低く、孤独感が一番強いのが日本です。二番目の国の三倍以上と、ずば抜けて低いです。日本では、主体的に社会と関わるような若者や子どもたちが少なくなっています。

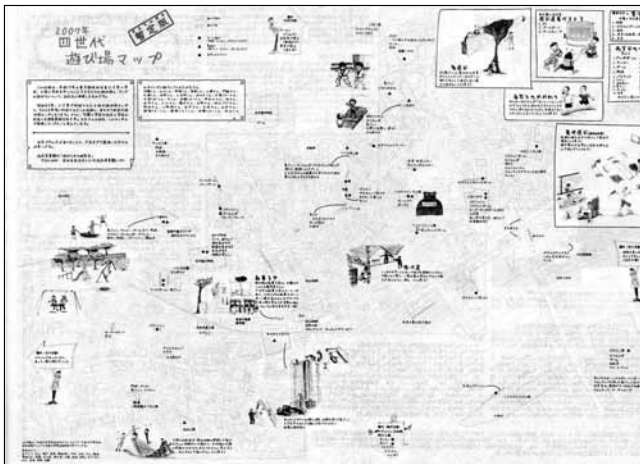
理由の一つとして、こういう遊びで思いきり遊んだ経験がないことがあります。体が大きくなって動きまわっていく時、就学前のもっともっと声を出したい時に大きな声を出して遊べていない。子どもというのは、奇声を発するものです。自分は何のくらい大声をあげられるかってね、「ぎゃあ！」って。それも遊びの一部です。

遊びと体、心と体の発達って非常にリンクしているの、そういう体験の少なさっていうのもいろんな問題になっているのかもしれない。

四世代目の遊び場マップへ

時代が進み、三世代遊び場マップの1982年当時に話を聞いた子どもが、もうお母さん、お父さんになる世代になりました。そこで、その子どもらの世代を四世代目として、数年前に作成したマップがこちらです。

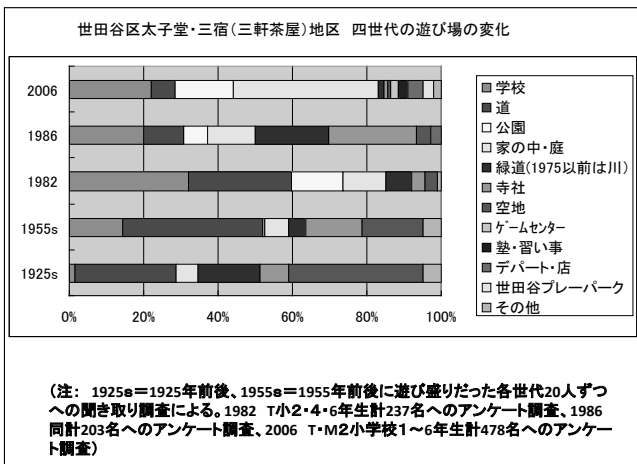
ここで出てくるのが、道路での遊びが消えていったということです。先ほどの三世代目の時は、結構、道路で遊んでいました。当時は、子どもにヒヤリングするのが楽でした。私たちが借りている小屋がありまして、通りで子どもを見つけては連れてきて1時間半か2時間くらい話を聞くのです。今、そんなことをしたら、警察がとんできますよ。だいたい、今の子どもたちは通りで遊んでない。子どもが見つけられない。だから四世代目の遊び場マップは、学校



に協力してもらって、放課後に何人か残ってもらってヒヤリングして作成しました。

結果は、このように、通りで遊んでいる子どもはほとんどいなくなりました。これも大きな変化です。不審者のこともあるし、車の交通も増えている。ほとんどが、家の中で遊んでいて外で遊ばなくなった。もっとも多いのは家の中、その次が学校です。

道路で遊んでいる時は、まちのおじさんおばさんが、大工仕事とか色々なことを教えてくれたり、人づきあいから多くのことを学ぶことができました。社会関係を、遊びながら学んでいたのです。それが今はほとんどない。



情報通な子どもたち

1982年当時は子どもたちからいろんなことを教えてもらった。

ここは、商店街の路地のところで家の前にウサギ小屋があって、ウサギが飼われている。この家のおじさんは、人が集まると出てきてウサギの芸を見せてくれる。普段から通っているところなのに、気がつかなかった。ウサギの飛び乗りとか、輪くぐりとか、芸をさせて見せてくれる。そんな面白いおじさんがいる。

それから、あの、おじさんはいつもお昼になると、屋根の上で昼寝している、とか。そんなのまで知っている。僕ら全然知らなかったのに。



その当時、子どもの方がまちのことをよく知っていました。通りで遊んでいるから。それが、社会関係ってことです。まあ、井戸端会議があったりして、まちはそういうふうに通りで用を足す。馬のりとか、路地でままごととか、そういう異年齢で遊ぶのが見られました。けれど、その姿は消えました。



遊べる道路

学会会議で、『我が国の子どもの成育環境の改善にむけて - 「成育空間の課題と提言(2008)」の検証と新たな提案』を政府に報告をした時、「遊べる道路」という内容の提案をしました。学会会議とは内閣府の所管の学术界を代表して、国に提言をする役割を担っている機関です。

提言や報告の内容は、ホームページには載せているのですが、ほとんどはあまり反応がありません。苦勞しながらやっけて「一体なんのためにやっているのだろう」って時々思うのですけれど。提言先の省庁に聞いても、いっぱい提言はあるし、内閣府の中でも学会ってなんだって聞

かれることもありました。モニタリングを初めて行ったのですが、その結果からも関心の薄さが表れていました。

そんな関心が薄い提言や報告の中、私たちの報告には、二件のコメントが寄せられたのです。あ、反応があつてよかったなあと思つたら、それは実はクレームでした。

「道路が遊び場なんてとんでもない。道路の騒音で悩まされている。そんなのを国に提言するなんてとんでもない」とお叱りを二件受けまして、「あ、なるほど、やっぱり今はそういう時代なのか」というようなことを感じました。

子どもの天国

さて、昔にかえつてもしょうがないのですが、明治はじめごろには、海外から来た人たちは、日本は子どもがニコニコして幸福だと言っていました。しかも、中には大人が子どもに関わっている、自分の子どもでないのに一緒に関わったり世話したり、子どもの天国だといろんな人が言っているのです。

もちろん、明治期の「おしん」のような厳しい貧しいくらしをしている子どももたくさんいました。児童労働などもありました。厳しい時代ではあるけれど、「子どもの天国」と、欧米から来た人たちが驚いていました。

良寛

越後の方、新潟で私が仕事をしていた時に、よく良寛のエピソードを広範囲にいろんな所で聞きました。

良寛つて、調べたら、40歳を過ぎてから子どもと遊びだして、死ぬまで遊んでいたそうです。子どもと鬼ごっこして、かくれんぼして、かくれたまま寝てしまつて、子どもは帰つてしまつとか、いろんなエピソードがあるのですね。

虎のまねをしたり、結構面白いのは、良寛はなんで子どもと遊び始めてずっと遊んでいたのだろう、これが不思議なのです。歌もそうですね、

「つきてみよ 一二三四五六七八九の十 十と納めてまた始まるを」

子どもと遊びながらもこういう歌を歌っている。すごいなあと思つています。

プレーリーダーとかプレーパーク。プレーリーダーはまだ若いころに関わつたので、一体いつまでプレーリーダーができるのだろうかということに関心がありました。良寛がね、死ぬまでできるつて。ああ、そうだなできれば良寛のようになれたらな、と思ひながらも、こんな書の才能もないし、歌をよむ才能もない。だからせめて、レレレのおじさんくらいになれたらな、と思つています。これもいつも道で掃除をしていて子どもに声をかける、そんなおじさんですよ。

どっかの自治体では、不審者と犯罪の防止から、通称「声掛け禁止条例」つていうのを作つたんですよ。こんな声かけのおじさんなんか捕まってしまうような条例がどんどんできてくると、さっきの大人と子どものコミュニケーションがどんどん取りにくい世の中になってくるようです。

子どもにやさしいまち

そこでどうしたらよいか。「子どもにやさしいまち」というユニセフのプログラムが参考になると思つています。もちろんユニセフですから、子どもの権利条約の関連の、むしろ子どもの人権というのかな。発達する、教育を受ける権利、まさにマララさんの問題意識。まさにそういうようなことがまだまだ課題としてあつて、子どもにやさしいまちづくりをしている。ただ、途上国だけじゃなくて、先進国においても子どもの発達というのがきちんと認められていない。安全面や大人の価値観から、外で遊ぶよりもいつも家の中で育つしかない。子どもが十分に遊ぶことができる、遊びの権利・・・遊びの権利つていうとなんか日本では権利つていうのが嫌われる言葉で、人権という言葉なんですよ。子どもの人権、遊びの人権、自由に成長する、そういうようなことが、背景にある。

そして、1996年、イスタンブールにおいて開催された第二回国連人間居住会議HABITAT IIにて発足したのが「子どもにやさしいまち」のプログラムです。もう一つの背景には1992年にリオで開催された地球環境サミットがありました。

その時に、「think globally, act locally 地球規模で考えて地域で実践」がスローガンとして唱えられた。環境問題は将来に、子どもたちに関わつてきます。資源や環境は、今の大人が全部搾取しているとどんどん大変なことになって



子どもに優しいまち Child Friendly Cities

「子どもに優しい都市」の形成は次の9つの原則から成り立っている。

1. **子どもの参画**: 子どもの意見を聞きながら、意思決定過程に加わるように積極的参加を促す。
2. **子どもに優しい法的枠組み**: 子どもの権利を遵守するように法制的な枠組みと手続きを保障する。
3. **都市全体に子どもの権利を保障する施策**: 子どもの権利条約に基づき、子どもに優しい都市の詳細な総合計画と行動計画を定めて実施する。
4. **子どもの権利の部門または調整機構**: 子どもたちの将来を見据えて、地方自治体の中に優先すべきことを保障する永続的仕組みを構築すること。
5. **子どもへの影響評価**: 子どもに関わる法律や政策、そして事業について実施前、実施中そして実施後に子どもへの影響を評価する制度化された手続きが保障されること。
6. **子どもに関する予算**: 子どものために適当な資源と予算が使われているかが調査されることを保障すること。
7. **子どもの報告書の定期的発行**: 子どもたちと子どもの権利についての実情について十分なモニタリングとデータ収集が保障されること。
8. **子どもの権利の広報**: 大人や子どもが子どもの権利について気づくことを保障すること。
9. **子どものための独自の活動**: 子どもオンプスマン、子どものコミッショナーなど子どもの権利を促進するために活動しているNGOや独立した人権団体を支援すること。

いく。そのつけを、子どもらにまわしていいのかっていうようなことがあって、子どもも大人も地域づくりをしているというのが、もうひとつの背景なのです。それで、子どもにやさしいまちが始まった。

筆頭には、子どもの参画です。子どもの意見を聞いて、将来のことがらに関わることは子どもの意見を聞くという。法的枠組みは、子どもの人権とかそういったこと。

日本ではいくつかの自治体が子どもの権利条例、そういったものを作っています。結構、その面では日本ではいろんな自治体に取り組んでいる。ただ、実際に子どもの参画があるかという点、条例は作ってもなかなか実際の活動には結びついていないところも多い。政策に総合的に展開しているかという点ではまだまだです。

「子どもにやさしいまち」には九つの柱がうちたてられて、それに向けて世界の数千の都市で実践されております。

世界の例

例えば、私が最初にこういった国際会議（二年に一度開催されている）に参加した2008年、ロッテルダムでの国際会議にて、最後の時に子どもらが景観の面でまちづくりの提案をしながら、表彰されていました。そして、市長がし

4. 世界の例
オランダ

ロッテルダム
子どもに優しい都市欧州会議
2008. 11. 3-5


会議開催をきっかけに市長が「子どもにやさしいロッテルダム」宣言
2百万ユーロ拠出を決定

- ・ 参加者 約300人
- ・ 発表者 約50人
- ・ 同時に4分科会
- ・ 「アーバンプランニング(都市計画)」と「子どもに優しい都市アセスメント」がテーマ

1. アーバンプランニング
子どもの遊びは変わっている ロマンティシズム禁物
総合的施策
大人のケア 安全と安心


II 子どもに優しい都市 アセスメント
建設的アプローチ (子どもの権利の主張のみでなく実質的に子どもたちにいい居住環境をつくる)
3つの質
持続可能性
シンプル/コンプリヘンシブ 総合的満足/喜び

III 政治翼
ヨーロッパに子どもに優しい都市の政治家のプラットフォームをつくる



イタリア 1996年からCFCを地方自治に


イタリア コレッジョ
SCHOOL BASED PARTICIPATORY WORKSHOPS
学校ベースの参加のワークショップ



参加のプロセスの中心的な部分である。ワークショップは2つの保育所、3つの小学校、1つの中学校で実施され、子どもと若者が学校の内外で4時間のプログラムに7回参加している。

これらのワークショップによって、子どもたちのニーズ、権利、問題と情報源、つまり場の要求とそこでの活動、関係と立場、まちのサービスと機会について、現実的な状況把握を行うことができた。

CITY WIDE PUBLIC WORKSHOPS
市役所での公開ワークショップ



市役所で行われた2回のワークショップは、テーマと解決策に関して、子どもたちと保護者が対話と協働を行うことができた、学校でのワークショップとはまた違う重要な機会となった。

1回目のワークショップでは、(マルチメディアを使って)テーマが説明され、議論され、そして優先事項を共有化したリストが作成された。(教室での作業からの発展)

2回目のワークショップでは、プロセスの結果が評価されて、それぞれのクラスで、長期的なプロジェクトとガイドラインに関する実現のための行動計画へと展開した。

両方のワークショップで、合わせて200人を超える子どもと保護者が活発に活動に参加した。

©Photos by Ray Lorenzo 子どもも未来ラボ

めくりに「このロッテルダムは子どもにやさしいまちになる」と宣言して、200万ユーロ、今のレートだと3億円近いですね、そのために出資するって約束しました。

イタリアの報告では、学校と地域が一緒になって進めている例が報告されています。事例地のコレッジョってレッジョエミリアってよく幼児教育で話題の地ですが、その近くです。そこでは、学校と地域が一緒になりながらワークショップで、子どもたちがまちづくりの提案をするんです。

レッジョエミリアというのは、自治体がまちぐるみで子どもの保育や幼児教育をやるってとこで有名ですけど、その周辺もそういうふうな空気が、文化があるので、こういうことが展開されているのです。

子ども代表委員

ロッテルダムの会議の報告ではフランスのユニセフの人が、就学前でも子どもの参画を推進していると言うんです。「えー、就学前でも参画ができるの？」って言ったら、「できるよ」って。これが、彼女からもらった写真です。こうやって、子どもらが話し合っている。そして、園長先生と交渉する。同様のことは、ドイツでも行われています。マニュアルを作って、そういう子ども代表委員っていうのを、幼稚園、保育園で作って園長先生と交渉する。園庭改善とか、子どもたちに密接につながることで行っ。自分たちの力で変えることができたという実感を得ることが大事という。

それで、ドイツで実際あるのは、そういうのに慣れた子どもらが小学校へ行ったときに、そういう子ども代表委員という仕組みがないっていうのを知って、校長先生に掛け合って「どうしてここには子ども代表委員がないのですか」って交渉が始まる。

「子どもにやさしいまち」はフランスでは200くらいの都市でやっていて、これが出生率の増加につながったかはわ

— 56 —

フランス	ユニセフ仏が音頭をとって 約200市町村で推進	A selection process based on four fundamentals
フランスでは 子どもの参加を全面的に推進 「子どもにやさしい」は持続可能な発展		Fundamental 1: "every day life", special attention to children well being
		Fundamental 2: child and youth consultation, participation and listening Fundamental 3: international solidarity Fundamental 4: advocacy for child rights
Sustainable development a priority, an "ecological" early childhood center in Paris		4つの基本のプロセス 基本1 「日常生活」特に子どもの福祉 基本2 子ども若者の相談、参画、話しを聞くこと 基本3 国際連携 基本4 子どもの権利の擁護
		©Mélusine Harlé, UNICEF France Child friendly cities officer – Rotterdam

かりませんが、子どもにやさしい国というのをフランスでは進めているんです。

子どもにやさしいむら

次にドイツについてです。人口減少が課題になっている村のことで。学校も空き教室をコミュニティセンターとしたりしています。

そこで、校庭の改善を「子どもにやさしいむら」と掲げて、村長さん、議員も一緒になってみんなが校庭で作業をしたりして自然豊かな校庭に改造したのです。それがテレビで放映されたら「そんな村なら私も住んでみたい」と、家族がどんどん越してきました。そして、新しい住宅地も作って、それも子どもらがその前に道路の安全を考えた結果を反映して、安全な道路かとか、ひとの敷地も学校の近道で通り抜けできるような住宅地ができて・・・こんなふうに「子どもにやさしい」を実行しているところが増えています。

ドイツ シャッフランド 「子どもにやさしい」を掲げて子どもが増えた。	
	
みんなの学校 シュレースヴィヒホルシュタイン州 シャッフランド	校庭を子ども達と改造
	
	新住宅地

子どもが自然に生まれるまち

フランス軍の駐留していた跡地の開発で、車を持たない主義の人集まれば、NPOが提案してEUの支援でつく

られた住宅地の例です。フライブルグのヴォーバンという住宅地です。にわかにつくったNPOの提案の住宅地開発案をEUが採用して、車を持たない、そして子ども、家族にやさしいまちが実現しました。結果、縁に駐車場をいくつか。どうしても住宅地開発だと基準で駐車場を作らなきゃならないことから、周辺に駐車場はあるけれど、中には車は入らない。緊急車両や引越の時には入るけれど、右側の方にサインがありますが、「遊び道路」、道路で遊ぶことがきちんと認められている。そういう道路でほとんど住宅地はできています。中庭から外の道路へ連続して遊びます。道路わきにバスケットボールのゴールがあったり、砂場があったり、水遊び、噴水なんかがあるいろいろな遊びができる。

ドイツ フライブルグ 自然と子どもを産み、育てたくなる住環境	
	
	
子どもを産みたくなるまち	
ドイツの子ども・家族に優しい都市 ヴォーバン地区(フライブルグ市) 道路は子どもの遊びが優先される。環境共生共同住宅も参加型でつくり、NPOが運営。ヒアリングによると、子どもを産んで育てたくなる環境で、一家に3人は子どもがいるという。	

ここで私は、何人も妊婦さんに会いました。そして子どもが道路で遊んでいる。子どもの写真を撮るのは、今は難しいです。写真を撮っていたら声をかけられて、何をしているとかどこから来たとか・・・厳しい質問ではなくて、これはチェックされているな、と思いました。eyes on the street, 防犯面で道路に目が注がれている。逆にヒヤリングするチャンスになって、子どももいっぱいいるし、妊婦さんもいっぱいいるし、「一世帯だいたい何人くらいいるんですか」と聞いたら、「三人はいるかなあ。だって、ここに住んでいると、自然と子どもができちゃうのよ」って。自然と子どもができるまち。安心感があり、みんなが知っている。子どもの歓声が本当に響く楽しいまちです。

この住宅地の周縁部の緑地帯に冒険遊び場ができていて、そのプレーリーダーに住民のお母さんがなっていたり、隣は子ども牧場になって高校生くらいの女の子3人が馬に乗ってパカパカやってきて小川の中に入っていったり、あ～、こんなところいいよな、こんなところに住みたい。とそんなまちがあるのです。

ミュンヘンの取り組み

ミュンヘンも、「子ども、家族にやさしいまち」を基本方針に、2000年に策定した総合計画として10年計画を立てました。90年代にNPOが議論して行政と一緒に作りあげていった政策です。

もともとミュンヘンは子どもにやさしくなかった。移民も多いし、いろんな問題があった。けれど、90年代にNPOが議論しながら、政策を変えていったんです。ミュンヘンの市民運動ってすごい。まあ、学生街があったり、そういう人たちがだんだん自分の中から議員になる人がいたり、中には青少年課長を元は遊び場の市民活動グループのリーダーの一人が務めるようになったり、行政も変わってきたのです。

政策には「ミュンヘンで遊ぼう」、「子どもにやさしい」方針が立てられ、そこで、「子ども代理人統括官」という、子どもの声を政策に反映させる、庁内調整の権限を持った専門職を置いています。現在、この職には遊び場活動の中の一人でヤナさんという人が担っています。彼女が進めてきたのは、こども・青少年フォーラムです。子どもらが区単位でフォーラムを開き、最後には市全体のフォーラムで話しあって、子どもたちが政策に提案するという活動を進めてきて、今はそれが仕組みとして行政の政策になっています。

子どもにやさしいレストラン、子ども家族にやさしい住環境、子どもにやさしいミュンヘン市民、そういうコンテストを子どもが審査員でやっています。



ここに写っているのは、子ども審査員です。この集合住宅は「子どもに優しい住環境」で表彰されたんです。また、「子どもに優しいミュンヘン市民」というコンテストもあります。われこそは子どもに優しいって市民が、まずは応募するわけです。子ども審査員がそれを見て書類審査でしぼりこみます。そして、しぼりこんだ人にインタビューして

いき、最後に選ばれる。それがこんなパンフレットになっています。選ばれた人の紹介とインタビュー風景も映されています。

ミニミュンヘン・ミニまつど

それから、松戸でもミニまつどってやっていますよね。子どもミニミュンヘンとかそういう子どものまち。よくキッザニアみたいな、と言われるのですが、キッザニアより非常に古いです。子どもが実際に全部まちをつくる。ごっこ遊びの延長です。お店やさんごっことか、ままごととか。

それで、ミュンヘンでは最初は国際児童年の1979年に5週間にわたって開催されました。子どもらがどんどんお店とか仕事を作っていきます。市長も子ども。市長選があって子どもたちの市民から選ばれます。議員も同様。そして行政の部署も子ども。そのように子どもがまちを作る。遊びといえば遊び。それがミニミュンヘンのはしりで、ドイツ内でも80以上に広がり、オーストリアとかいろんな国にも広がり、日本でも60箇所近くあるんです。千葉県内でもミニ佐倉、ミニ市川が古く、他県では四日市、仙台等かなり広がりがあります。

この間の夏休み、高知市でとさっこタウンが開かれていた時、子どものまちサミットという子どものまちの全国大会が開かれて、参加してきました。とさっこタウンは実際のビジネスとつながっている点が特色でした。ミニミュンヘンでは、各ブースに本物の方、レストランだったらコックさんが3人くらいいて、そういうように実際の専門家が交わりながらやる。とさっこタウンもそうでしたね。みんな、子どもたちのブースを専門家の方が手伝っている。しかもボランティアで。芸子さんも入りながら、子どもらも芸者遊びをする。はちけん遊びをやる。私もはちけんをやらせてもらいました。





そしたら、みんな外に出てきて、スプーンの先に玉子を置いて競争しあう伝統的なリレー競争等、大人も子どももみんな楽しんで、盛り上がりました。それが結構話題になり、同様の活動が広がりました。Adrian Sinclair氏のサポートで1998年に子どもらは連邦下院議会に、遊ぶことができる道路の整備の陳情に行きました。その結果、6000万ポンドの予算が計上されてパイロットプロジェクトとしてホームゾーンという名称で歩車共存道路の整備を英国国内10ヶ所で実施するという確約を得たのです。

子どもの声を聞くという動き、子どもの権利条約の面でも英国では活発な市民活動があります。その運動から英国の各州では子どもコミッショナーという子どもの声を代弁する専門官が置かれるようになりました。

ウェールズは非常に進歩的なことをやっています。遊びの法律まで作ってしまいました。



子どもにやさしいまち 国際会議

私は神谷先生と一緒に2009年子ども環境学会の全国大会を千葉市で開きました。同じ実行委員でやったのですが、大変でしたよね。その時に子どもにやさしいまちのアジアパシフィック地域の第1回国際会議を併せて開きました。

しかし、私たちの力不足で、第1回会議は世界から10数人くらいしか来なくて、小さな会議になりました。

第2回会議は、インドネシアのスラカルタという別名のソロシティでやりました。参加者は500人ほどは集まったかな。子どもらも270人くらい集まって子どもフォーラムが開かれました。

ストリートパーティも行われ、道路で伝統的衣装を身につけた踊りずらのダンスとパレードが行われました。市長ジョコ・ウイドド氏の演説も素晴らしかった。自分の給料を削減しながら、教育費の予算を13億ルピーから620億ルピーに3年かけて引き上げ、貧しい家庭の子への教育や保健医療サービスを無料にし、地域の大きな公園を建設し、最も必要とされる地域に遊びと教育の子どもセンターを15ヶ所設置し、モーターバイクの事故死を減らした。市長のリーダーシップで4、5年前から子どもにやさしいまちづくりを進めているソロシティには驚くことが多かったです。



ジョコ・ウイドド氏はのちにその政策が評価されてジャカルタ州知事になり、2014年春の大統領選で候補に選ばれた。選挙戦は、旧勢力の巻き返しがあったが、勝って庶民層からのインドネシア初めの大統領となった。「子どもにやさしい」を掲げた自治体の首長が国のトップになったというのは初めてじゃないでしょうか。

そういうこともあってインドネシアの勢いはすごいです。

インドネシアにはSOS子どもの村というNGOが運営する社会的養護施設が発達しています。虐待などを受けた子どもたちの避難場所ともなる施設で、学校に行かない子どもらもそこで教育を受けるような仕組みがある。そのNGOも行政と連携して子どもにやさしいまちに向けて子どもの参画を進めています。子どもらはアヒルを飼い、ナマズを養殖して、それを売って資金を稼いでいます。労働さ



社会的擁護施設 SOS子どもの村 (キンダードルフ)でのこどもたちの参画活動

ナマズやアヒルの飼育

せているわけではなく、良い意味で教育と合わさった形で運営にも参画しているわけです。そういうような展開があります。

復興まちづくり

日本の事例として、復興まちづくりの話をちょっとします。南三陸町で、私は震災後に国際的NGOワールドビジョン・ジャパンから依頼されて、子ども参画の復興まちづくりの手伝いをしました。まず、戸倉中学校の中学二年生の総合的学習の時間で産業のことをテーマに子どもたちと復興を考えるワークショップを行いました。



5. 復興まちづくりへ Case 1:南三陸町 戸倉中学校2年生 復興への提案づくり
At the class of 2nd year of Tokura Junior High School

戸倉中学校は校舎が1階部分が浸水し、全壊の小学校とともに2011年度は隣の登米市の廃校を活用して開校。ワールドビジョンの支援によりバスにて40分かけて通学。また登米市の仮設住宅に移り住んだ子どもも少なくない。2012年度は南三陸町の志津川小学校、中学校にて授業再開。しかし登米の仮設住宅の子どもらには遠くなり、生徒数の減少にもつながら、中学校の統廃合（以前から計画にあったが）に傾いている。写真は登米市の廃校の活用時2011年

戸倉中学校は1階部分が津波で浸水し、被災した1年目は隣の登米市の廃校の建物を利用して小学校と共に、学校を再開していました。戸倉はふるさと学習を30数年続けてきた伝統があります。伝統的な舞いの鹿踊りを復活させて、子どもたちに教えていた村岡さんという方がいます。被災後、その鹿頭を瓦礫の中から探し、また全国からの支援を得て、ふたたび鹿踊りを途絶えることなく子どもたちに教えに来ていました。

漁師さんたちも子どもたちの磯学習、泳ぎや潜り方、シュ

戸倉の地区には伝統的な鹿子舞いを小学校時代から子どもたちは習得する。その地域の指導者が、隣の登米に移った学校にまで来て指導している。この鹿子舞いは2012年の夏にテキサスに招待され、ダルビッシュの居る球場にて披露された。



ノーケル、それから大きい子になるとスキューバダイビングまで教える。漁師さんたちは、子どもたちにあだ名で呼ばれる、親密な大人と子どもの関係があります。そういう中ですので、漁師の後継者が育つ、地域密着の教育がなされていた所でした。被災後、子どもたちが初めて海に出るとかそういうような機会にワークショップの第一回目が開かれました。

子どもたちはキャラクターを考え、CMを作ろうとなった。担任の先生が昔、音楽バンドを行っているのでCMソングの曲を作ろうとなった。歌詞はみんなで作り、先生が

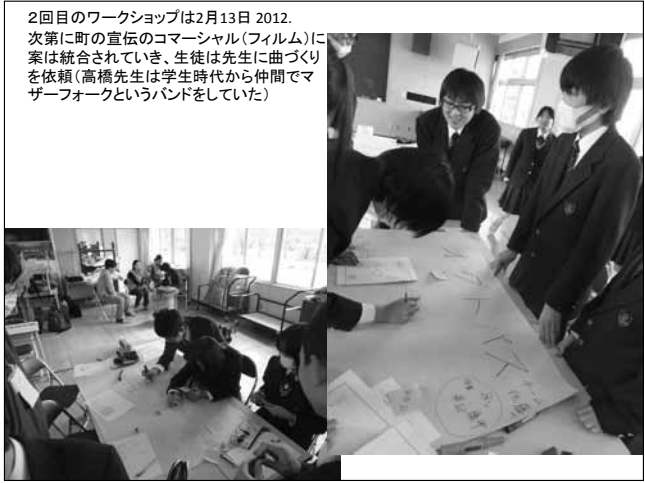


第1回目のワークショップ 平成23年12月5日
最初に戸倉中学校の2年生の「産業」をテーマにした総合学習の時間で相談を受けてワークショップを開催。



子どもたちは町のキャラクター「オクトパス君」の仲間のキャラクターづくりを提案

作曲。この（流れている歌は）先生が歌っていてYouTubeにアップしたものです。最後に子どもたちが世界のいろいろな言語でありがとうと言っています。支援を世界中の方からいただき、種をいただいたので、花を咲かすのは私たちという意味の歌で「花」というタイトルです。



2回目のワークショップは2月13日 2012.
次第に町の宣伝のコマーシャル(フィルム)に案は統合されていき、生徒は先生に曲づくりを依頼(高橋先生は学生時代から仲間マザーフォークというバンドをしていた)

戸倉中学校だけではなく、まち全体で子どもの参画の復興まちづくりをすすめるために注目したのがジュニア・リーダーでした。東北の地域はジュニア・リーダー活動が盛んです。宮城県から始まり、日本中に広がった中高校生のボランティア・サークル活動です。社会教育のジュニア・リーダー担当がいます。小学生時代に子ども会から育った中高生がボランティア・サークルとして子ども会に出向いて、小さい子たちの遊びや文化的活動を支援する。ジュニア・リーダーは、研修を受けて、だんだん階級が上がる力をつけています。だから、震災後すぐの被災地の避難場所やなんかでも彼・彼女達が自ら動き出す。素早い動きをする。親も含めて大人、お年寄り世代もやる気が起きないので、自分達が立ち上がって動き出す。すごい力があるんです。

このジュニア・リーダーに集まってもらい、復興まちづ

くり提案づくりを行いました。

事前に復興担当にも聞き、調整を行いました。これは重要なことです。ワークショップを行っても活かさない計画では駄目です。この段階で全体構想計画を考えても、もう既に町はそういう絵を描いているので、具体的な計画に照準を合わせました。教育委員会に協力してもらい、全小中高校生にアンケートを行い、その結果をもとにワークショップを行いました。

ワークショップの結果、カフェ付き公民館の提案が第一



第2回
2012. 1. 21

ジュニアリーダーはふだんの研修でグループ活動に慣れていてワークショップのノリも最高であった。自然とロールプレイも。



第3回
2012. 1. 29

町長を招いて懇談。中間報告的にその時に描いている構想を発表。町長から意見を聞く。

Case 2 南三陸町ジュニアリーダークラブ「ぶらんこ」のワークショップによる復興まちづくり提案



第1回
2012. 1. 15

Issue	Vision	Concrete Action	Who?	When?
課題 (現状・問題)	目標の姿 (にあってほしい)	具体的な行動 (何を見具体的にやるか)	誰が	いつから
Lacking of communication, and the place for it.		Library Caffe Community center	町 大人	
Community tie, Learning			町	

の提案となりました。彼女たちは、避難場所でボランティア活動しながら、外から支援に来ているいろいろな人のコミュニケーションから学び、地域の人だけではなく、外からの人も立ち寄れる公民館を提案したのです。またそこには自分たちが震災の語り部となって、語りを行うステージや展示のスペースがある。また学校帰りに寄れる図書館も併せ持った施設です。ジュニア・リーダーは非常に能力が高く、対話も途中、演劇的にやったりして、KJ法等にも慣れています。ほくが活動計画書のツールを示したら、これは使いやすいって褒められたりしました。

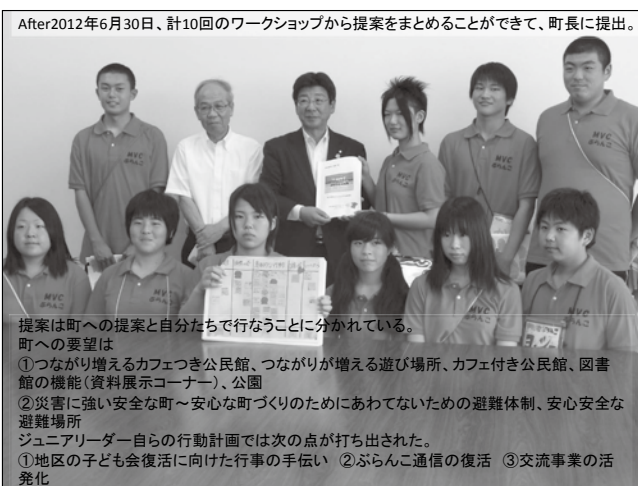


提案内容

公民館+カフェ+図書館+展示場所+ステージ
+子ども・ジュニアの居場所+公園+遊び場

2012年3月25日には市民の前で発表、市民参加のワークショップも世代別のグループで実施。この企画もジュニアリーダーによる。

ワークショップにおいて大人の役割は首長を呼んで提案内容を理解してもらい、提案が現実に反映できるように調整することです。ワークショップの参加者は限られているので、ジュニア・リーダーもできるだけ町民全体に知らせたいと、演劇仕立ての発表会とワークショップを企画してやったりした。そして最後に町長に提言書を渡しました。



After2012年6月30日、計10回回のワークショップから提案をまとめることができ、町長に提出。

提案は町への提案と自分たちで行なうことに分かれている。町への要望は

- ①つながり増えるカフェつき公民館、つながりが増える遊び場所、カフェ付き公民館、図書館の機能(資料展示コーナー)、公園
 - ②災害に強い安全な町～安心な町づくりのためにあわてないための避難体制、安心安全な避難場所
- ジュニアリーダー自らの行動計画では次の点が打ち出された。
- ①地区の子ども会復活に向けた行事の手伝い ②ぶらんこ通信の復活 ③交流事業の活性化

そのジュニア・リーダーの活動は国連にも知らされ、2013年の3月に、その活動の初期のリーダーであった高校三年生の三浦ほのかさんが、国連水と災害特別会合に代表として招待され、スピーチをしました。もうひとり日本から招

待されて講演をしたのは、皇太子でした。

そんな世界の主要なメンバーが参加する国連の重要な会議に、高校三年生の女の子が参加してスピーチをした。あとで「良かったね」って言ったら「いい経験をさせてもらいました」ってメールで返事が返って来ました。



人材が育つことが本当の復興

さて、子どもにやさしいまちの取り組みのうち、日本では子ども条例づくり等の法的枠組みづくりはいろいろな所で熱心に行われています。

子どもの参画については、子ども会議、子どもフォーラム等子どもたちの話し合いの場づくりがあります。また、子どもの居場所づくりっていうものもありますね。しかし、復興っていうのは、まさに子ども、人材が育つということが本当の復興になるんじゃないかと思っています。

さきほどの戸倉中学での総合的学習のワークショップ同時に中学二年だった康平君は、今、高校二年生になって、鹿踊りでこの間、2014年の夏にパリに招待され、パリで鹿踊りを演じてきたのです。彼も震災を契機に非常に世界に目を開いて、前を向いて生きています。

子どもたちは世界からいろんな支援を受けたことを有り

赤字はユニセフを意図して動きがある所

日本での取り組み

子ども条例 **子どもの権利条例** 出典：2011.1現在、子どもの権利総合研究所

総合条例 23 (川崎市、奈井江町、多治見市、目黒区、茅ヶ崎市、札幌市等)
 個別条例 18 (教育やオンズパーソンなど中野区、鶴ヶ島市、川西市等)
 原則条例 43 (箕面市、世田谷区等や都道府県に多い)

子どもの参画

子ども会議 川崎、札幌、多治見市、豊田市、八王子市など多く一般
 子どもの居場所の運営参画 川崎、杉並、千葉など普及中
 子ども参画のまちづくり 川崎、札幌、世田谷、ニセコ(中学生会議)、愛知県東郷町(中学生会議による総合計画)、など普及中
 子ども参画の次世代育成支援行動計画(後期) 千葉、横浜、名古屋など
 子どもまち 佐倉、市川、横浜、札幌、四日市、千葉、名古屋等約20自治体

子どもの居場所

杉並(ゆう杉並)、川崎(夢パーク)、千葉(きぼーる、子どもカフェ)等

子どもの村(社会的擁護施設)開設 福岡こどもにやさしいまちづくりネットワーク(企業も参加)

子どもにやさしい復興まちづくり ユニセフ、セーブ・ザ・チルドレン、ワールドビジョン、こども環境学会、子どもの権利条約ネットワーク等の主催

難しく思っていて、それが世界に目を開く契機ともなりました。この「花」という康平君たちが作った歌のように、芽を、種をもらった、その種から花を咲かせるのは私たちですという意味です。康平君がパリに鹿踊りで行くのは決して同情されに行くのではない、戸倉の良さを伝えて、いずれ、世界からここに訪ねてくるような所にしたいという思いを強く持ってパリに行きました。そんなように人材は育つということが、本当の復興ではないかと思っています。

柿どろぼう大会

さて、今度は地元、松戸のことです。私も、世界的に考え、地域で実践することをモットーにしているので、小金地区のまちづくりのお手伝いをしています。わくわく探検隊も16年目を迎える子どもたちのまち探検の催しです。現教育長と出会ったのもこの催しです。

わくわく探検隊の始まりは、もともとは駅前再開発の検討の委員会にて地権者の人たちと出会い、しかしバブルがはじけて再開発が成り立たず、地権者の人たちから、このまままで終わらせたくない相談を受けて、子どもとともに地域の宝物は何か、それを探す探検隊を始めたのです。

いきなりではなく、まず歴史の勉強会をやった中で、秋のある時にですね、カキの実がたわわに実ってるのですが、このカキを食べてる様子がどうもなくて気になりました。そこで、「あれ、甘柿ですよね、なんで食べないんですか？」って、勉強会の時に聞いたら、「いや、年寄りばかりだしなあ」と。それで、「昔は柿どろぼうなんてやったんじゃないですか？」って言ったら、やったやったなんて柿どろぼう談義で話が弾みました。

そこで、“子どもらに柿どろぼうをさせよう”ってというのが最初の発案だったんです。学校の先生は、いきなりそんなことやってもらったら困ると、そこで事前に協力してくれる家に挨拶と相談に行きましたら、皆様、喜んで受け入れてくれました。このお宅は、子ども100人分のジュース

6. 松戸にて 小金地区の場合



食べられる景観

とお菓子を用意してくれました。

教頭先生が張り切って、竹の先に裂け目をつくり間に棒をさして、カキをもげるようにしてくれました。しかし、子どもたちは使い方を知らずにね、カキをばったばった叩いている。カキが取れると、喜んでかぶりつく子もいれば、持って帰ってお母さんに見せたいという子もいる。この催しが評判になり、各家の庭を訪ねるわくわく探検隊というのになりました。

現教育長が小金小学校の教頭でおられたときに、地域の歴史に関わる幕末の時の話を寸劇仕立てで行ったときは、教頭先生が悪者役で、新米の若い先生が主役というのでやったんです。いつもと逆なので、子どもたちは目を丸くして見入っていました。

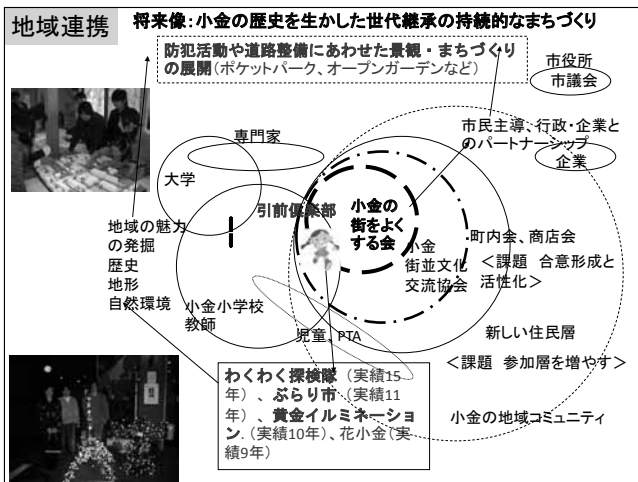


わくわく探検隊の終わった後にこんな感想をカルタにしたためています。



それから小金のまちをよくする会というまちづくりの会が、わくわく探検隊から4年後くらいに立ち上がりました。当時、定年退職したばかりの大塚さんが、のちに連合町会長になって、今は松戸全体の連合町会をまとめてまちづくりを展開されている。

このお宅は、そういう庭訪問からオープンガーデンの催



しを行い、その延長でカーポートを自由にデザインしてよいとなった結果です。ちょっとした休憩できる場で、子どもたちも一緒に作りました。個人の土地で、費用も自分で出して。地域にひらかれた場所。これも非常に地域の人から喜ばれ、どんどんまちづくりの活動に展開していています。



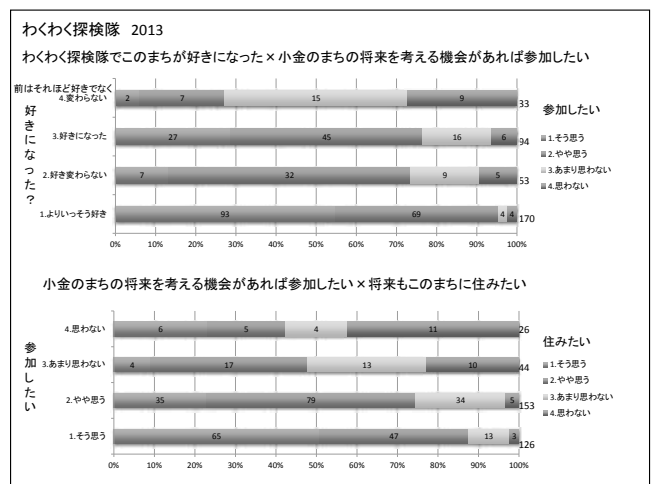
4年生とタイアップした花小金。これも町をよくする会の活動です。そして、わくわく探検隊は、3年前から当時



の渡辺先生が、これはいいことだと4、5、6年生の総合的学習の時間に組み込みました。

前は地域発の地域の行事だったのが、今後は学校の授業となったのです。今まで地域の人が準備していたのを、6年生が企画してやることになりました。今までは地域が張り切ってやっていることを6年生がやるようになったので、その変化にはちょっとやりとりもありましたが、今年は6年生が時間をかけて夏休みなんか準備するのを地域の人が協力するって感じでやっています。こういうわくわく探検隊でこのまちが好きになったという子どもが多いのはアンケートの結果からも言えています。

アンケートの結果から、このまちが好き、まちづくりに参加したいという子どもは、将来このまちに住みたい、という相関の強さが表れています。



今年は小金公園(きよしがおか公園)の改修について、子どもらが提案するのを我々も手伝いました。行政は地域の人達の参加するワークショップを3回しか用意していない。それでは意味がないと、事前に子どもたちが調査してしっかりとどんな公園がよいか考えて、模型まで作って提案しました。大人の公園づくりのワークショップの時に、

子どもたちの提案をみんなで聞き、ワークショップに弾みがつきました。



2014年度わくわく探検隊



子どもにやさしいまちを進めるには

最後にまとめます。子どもの参画の推進は世界のいろんなところで進めています。

定番なのは、子どもたちの意見が聞ける、子どもフォーラム。それから子どもの意見の代理人のような、子どもコミッショナー。それから、こういういろんなプログラムで子どもの参画をする、ファシリテーターか、声を聴いてくれる頼れる大人、まちのおもしろおじさん・おばさん。それから、子どもたちがいつもたまる居場所。そういうものも必要かと思います。「学校、幼稚園、保育園などで子どもの参画をすすめ、子どもの声を反映する」、そういう仕組みが必要です。小さな事業から、園庭からとか、校庭から、とか、できることからやる。

そういう時にまずは遊びから進めるのがよい。遊びは子どもの主体的な参画です。そういう楽しい、おもしろいものを、大人も遊び心を持って考えるのもいいかもしれません。いろんなアプローチがあるわけです。

では、以上で私の話を終わりにさせて頂きたいと思います。

6. まとめ～子どもにやさしい奈良のために

子どもの参画の推進に向けて

- **子どもフォーラム** 行政施策へ意見反映の仕組み
- **子どもコミッショナー** (行政内の部署横断的に調整権限をもって子どもの視点で施策を展開)
- **子どもの参画ファシリテーターまたは声を聞いてくれる頼れる大人(まちのオッサン、オバサン)**
- **居場所 第三の場所 家、学校以外の居場所**
例 道路、駄菓子屋、図書館、児童館・ユースセンター、子どもカフェ
頼れるアニキ、アネキ
- **学校、幼稚園、保育園での取り組み** 子ども代表委員会、対話
- **小さな事業から** 園庭・校庭・遊び場づくり等
- **遊びからの参画** 例 こどものまち

質疑

<質問者>

川崎市の生涯学習センターで働いています。

昨年、ベルリンの小学校に行きまして、実際に子ども代表委員のことを先生の話のような所を見学してきました。本当に子どもたちが行きたいと思う学校づくりをしていることがすごく素敵だなんて、私も思いました。

日本に帰ってきて、川崎市も子ども権利条約を掲げているのですが、実は声として、「子どもの権利、権利と言っているから子どもが生意気になるんだ」と言われたことがあるんですね。なので、メリットがあることはよくわかったんですけど、社会として子どもが参画することはどういうメリットがあるのかということを教えていただきたいのですが、お願いします。

<木下勇先生>

まず、喜多(早稲田大学教授)さんたち法律の専門の人たちを中心に、川崎子どもの権利条例を作ったり、子ども条例、子どもの権利条例等、自治体の法的枠組みづくりが広がっています。しかし、中には子どもの権利という、「権利」っていう言葉に過剰に反応して、条例づくりがうまく行かないケースもあります。

ヨーロッパと違って、主体がはっきりしているわけではなくて、村社会的に…というのも村社会というのは個人を消して村の共同が大事。だから逆に村八分みたいな問題もあるんですけど、そういう精神風土のところは権利って言うってしまったから、ちょっと誤解を受けている。けれど我々は、基本的な人権、子どもが発達する人権として考えている。

日本社会は、村社会から現実的には、さっきの子どもの騒音の問題のように、個人化した社会になっている。そういう中で、子ども一人一人の人格とかも含めて、子どもと大人が本当にこう楽しく、個人で幸せに暮らせる社会って

いう仕組み自体を変えなければならない。日本の社会では、どうもそのあたりでは理解されない。誤解もそのまんま。きちんとそういうのが納得した上でどういう社会を作るか、というのができていない。

ドイツは子どもフォーラムとかいろいろなことをやって言葉を積み重ねて、施策を作る。それもドイツなりのやりかたかもしれない。ある意味、筋が通ってはいる。日本の社会は、対立するものを曖昧にしたまま、時に政治が変わればその時の雰囲気でも揺り戻しがあったりだとか、自治体が進んで作っていくものがある。非常にそのところが難しいのがひとつありますね。

政令市等で子ども関係の横断的・総合的な施策のために、子ども未来局を作っています。しかし、実際はある部局内だけとなる。川崎では虐待問題とか人権面で成果はあげているんですが、総合的な施策への展開にはまだなりえていません。

子どもの施策がまちづくりとは連携していないんですよ。そこのところもちょっと、いわゆる日本の縦割り、行政の縦割りの仕組みっていうのが変えられてない。

パートナーシップとか協働とか言いますが、その縦割りに市民団体もまきこまれて、市民団体同士もつながらないっていうのもあるかもしれない。そのあたりは、まだまだ課題ですね。それをどう変えるかっていうと、子どもの参画で変えてく。

これは実際に土佐で聞いた話ですが、変ないがみあいとか、変なことでも対立している団体同士が、子どもに向けて色々やる時に、こう反省したのです。「こんなことでいがみあっていて、子どもを前にして大人げない」と。子どもを前にした時に、基本的な、建前であるかもしれないが、それは全体の正論のことが前面に出てくるわけです。

子はかすがいっていうように、子どもはいろいろなものをつなげ、結束させる存在です。子どもは大人の欺瞞や不正を見破ります。本能的に色々なことを察知する。大人の態度から、「大人は陰険」だっていう印象を子どもに与えるのはよくない。子どもにどういう影響を与えるかは、次の世代に伝えるものがあるかどうか、何を伝えるかを大人が考えることです。伝えてくってことは本能的なことなんです。そういうところに、子どもを前にして正論が通るような社会を作っていくことが大人のやることです。

日本の社会っていうのは、本音と建て前を使い分けている。だから曖昧にしていく。そのあたりは、そういう文化は国際化の中でやっていけないし、本音と建前を使い分けられるセンスをもっている若い世代はほとんどいなくなっている。大事なものは正論の中でそういう論理を通してくと

いうこと。それが、子どもの参画です。それが国際化するってことになるんじゃないかなあ。

でもまあ日本独自の文化も精神論も重要なことです。そういう中で子どもたちを前にして何を伝えてくかというところ、本質をどンドンつついていく、これが子ども参画をやる意義じゃないでしょうか。

<質問者>

ありがとうございます。